

OB訪問



渡邊さんは本学看護学科の4期生、大正9年(1920)開院の歴史ある慶應義塾大学病院での勤務も15年になります。現在は24時間365日体制で年間約2万人の救急患者を受け入れる救急外来で主任看護師として活躍しています。

慶應義塾大学病院救急外来 看護師

渡邊 久覚さん (看護福祉学部看護学科2000年3月卒業)

■ 年中無休の救急の現場で

渡邊さんの職場、慶應義塾大学病院救急外来は、救急車では主に2次救急(入院治療が必要)患者さんが搬送され、重篤な3次救急(ICUでの治療が必要)にも対応しています。加えてご自身で受診に訪れる年間約1万人を数える患者さんにも対応。救急外来は、心筋梗塞や脳卒中、事故等による外傷、薬物中毒など、重症から軽症までありとあらゆる疾病を24時間体制で受け入れる救急医療の最前線の場です。

■ 助けた命のその先を

「救急」という言葉の響きから、一刻を争うスピード感と緊張感、ドラマチックなイメージが持たれる救急外来。渡邊さんも「TVドラマのクライマックスのように、救命できた瞬間がやりがいのあるピークと思われることが多い」と言います。しかしリアルな救急医療の現場は少し違うようです。「助かったもう大丈夫、ということはありません。最終的に元の生活に戻れるかどうかが重要です。そのために何をすべきかを考えます。ですから私たちは急ぐんです。救急医療が予後を左右します。例えばショック

状態^{※1}の患者さんも全身への影響が最小限のうちに、少しでも早くバイタルサイン^{※2}を安定させられるかで患者さんの人生が大きく変わります」。

重篤な患者さんが搬入されれば救急外来は医師や看護師が目まぐるしく動く熱い医療現場になります。その中で渡邊さんはスピーディーな処置と同時に患者さんの情報収集に努め、その生活を思い描きます。何をしている人なのか、なぜここに来ることになったのか、家に家族はいるのか。「たとえ意識がなくて会話ができない状態であっても患者さんを生活者として見る視点を忘れません」と言う渡邊さん、信条は「クールヘッド、ウォームハート(冷静な頭脳と温かい心)」です。

※1 様々な原因で血圧が極度に低下し、全身の重要な臓器・組織へ十分な血流を保てなくなった状態。

※2 「生きていけるし」。基本的に脈拍、呼吸、血圧、体温を指します。

■ 後輩のロールモデルに

看護師主任である渡邊さんは看護師のシフト作成、資材・機材管理、研修受け入れの調整、診療科との折衝など管理職としての業務を担うと共に、3交代勤務の現場で看護を実践し後輩を指導する、いわゆるプレイングマネージャーです。さらにこの15年間、もう一つのロー



静岡県出身。高校ではテニス部でしたが「よりアグレッシブなスポーツを」と本学ではアメフト部へ。副将を務めました。ストリートに力と力がぶつかり合うアメフトは、「体」「運動」「人」が好きという渡邊さんの心身を鍛え、人格形成を促したといいます。

ルモデルとしての役割も果たしてきました。

渡邊さんが慶應義塾大学病院に就職した2000年は同院が初めて新卒男性看護師を採用した年。この年採用された男性看護師は5人、全員が本学卒業生でした。「当時男性の仲間を初めて受け入れた女性看護師にはとまどいや違和感もあったようですが、それもいまはなくなりました。看護師として、性差は個性の一つです」。現在同院に勤務する約1000人の看護師のうち男性は80人ほど、大きな力になっています。本学でも、現在看護学科で学ぶ学生の8人に1人が男子です。

■ キャリアビジョンを描く

救急外来勤務を通して災害看護分野に強い関心をもつようになったという渡邊さん。災害看護専門看護師、災害看護グローバルナース、災害派遣医療チーム(DMAT)など、いくつものキーワードから今後の可能性を考慮して、キャリアビジョンの輪郭も徐々に見えてきているようです。大きな災害を経験した我が国でその発展に期待が寄せられる災害看護、いつか渡邊さんからその分野のリアルなお話を伺えるかもしれません。



ここから手術室やICUへ移される患者さんといえば、鼻にブロックを詰めてしまい泣いている幼児も。看護師には広い知識、素早い行動力、冷静な判断力、そして安心感を与えられる対応力が必要です。

